

第1章 複式学級における算数科の学習指導

第1節 複式学級における学習指導

本節では、複式学級の特質を生かした学級経営、学習指導での工夫、指導計画の類型などについて説明する。

1 複式学級の特質と学級経営

(1) 複式学級の特質

複式学級は、2つ以上の学年で構成される学級である。複式学級は、低・中・高学年別（1・2年、3・4年、5・6年の組み合わせ）で構成されることが多いが、その他にも、2・3年や4・5年の組み合わせになったり、あるいは、隣接しない学年で構成される学級になる場合もある。

複式学級については、一般に次のような特質が指摘されている。

学級の構成は少人数となることが多い。素朴で明朗な性格の子供たちが多く、勤労を厭わず根気強い。互いに親戚関係にある子供も多く、人間関係は密接で協力的である。その一方で、対人関係などの範囲が限られるため、多様な経験をもちにくいこともある。行動において消極的であったり、学習意欲が低調になる傾向が見られることもあるといわれている。

学級経営の面から見ると、学年の違いをこえて家庭的な雰囲気の中で学習指導が進められるなど、子供相互の協力的な活動が行いやすい。一人一人の子供が主役として期待

される場面も多い。しかし、そのために上学年の子供の負担が過重となることもある。下学年の子供が上学年の子供に対して依頼心もちやすくなったり、互いに切磋琢磨するという雰囲気になりにくいことがある。また毎年、上・下学年が入れ替わることもあり、学級経営の積み上げで困難となることもある。

このように複式学級には様々な特質が見られる。これらをよく理解し、その長所を生かすと同時に、長期的な見通しに立った学級経営の工夫改善を行っていくことが大切である。

(2) 複式学級の特質を生かした学級経営

複式学級の特質を生かした学級経営を進めることによって、効果的な学習指導のための環境を整えていくようにしたい。複式学級の有利な点に着目し、それを生かしていくような学級経営に努めるのである。以下に、そのための着眼点をあげることにする。

① 少人数であることを生かす

学級が少人数で構成されているため、教師は一人一人の子供と接する時間や場面が多くもてる。子供の個性をとらえたり、個性を伸ばしていくための計画も立てやすい。また、教師が子供たちの学習活動の中に入っていくなどして、効果的な指導を行うこともできる。

少人数であるために、集団としての意欲が高まりにくいこともある。一人一人の子供がよさを発揮したり、それぞれの役割分担や責任をはっきりさせることによって、相互に協力し合って活動できるようにしていきたい。また、少人数であるために、一人一人の子供が算数の教具に直接に触れたり、操作活動を行っていく場面や時間を多く設けることもできる。そうした工夫によって、より豊かな学習活動ができるようにしていきたい。

② 異年齢集団であることを生かす

異年齢の子供たちが集団をつくるために、同一の学級内でも子供たちの特性や行動の仕方などに多様性が見られる。学級の子供全員が一斉に行動することによって、子供たちの役割の意識を高める工夫が考えられる。上の学年の子供が下の学年の子供の行動を助けるなどして、リーダーとしての自覚をもてるようになる。

高学年になってくると、上の学年の子供たちの資質や能力がすぐれていることが目立つことも多くなる。下の学年の子供のお手本となることもある。学級の子供たちが学び

合い、活動し合うようにして、それぞれのよさを伸ばしていくようにしたいものである。

③ 子供同士が協力関係にあることを生かす

学級の子供同士が地域社会でも行動を共にしているなど、お互いがよい協力関係にあることが多い。学級での活動でも、お互いが協力することのよさを発揮して、成果をあげていくようにしたい。子供たちは共同で活動する際のチームワークの大切さを確かめ合ったり、互いの長所を生かしていくことのよさを味わっていくようになる。

子供たちが幼児期から互いに知り合っていることによって、それぞれの役割を固定的にとらえることも見られる。教師が適切な助言をするなどして、一人一人の子供がいろいろな役割を務めるなどの体験を積めるようにして、お互いの新しいよさが発見できるようにしたい。

2 指導内容の組み合わせや指導方法にかかわる工夫

複式学級における学習指導では、複数の学年の子供を指導していくため、指導内容の組み合わせを考慮したり、指導方法の工夫をしたりすることが必要になる。

(1) 指導内容の組み合わせ

複数の学年の指導内容を組み合わせる際には、次のような考え方がある。

① 異なる内容の組み合わせ（学年別指導）

上下の学年の子供たちに、それぞれ別の教科、あるいは同じ教科でも異なる内容を指導するものである。

この場合、教師はそれぞれの学年の子供に異なる内容を指導するので、一つの学年に指導している間は、他の学年の子供は自主的に自分たちの学習を進めていく必要がある。こうした学年別指導では、学年間での子供の学習面での交流は少なくなる。教師の教材研究の準備がより多く必要となったり、教師の指導の負担が重くなるといった指摘もされている。

② 類似内容や同一内容の組み合わせ（同単元指導）

同時に異なる内容の学習が進むと、指導は行いにくくなる。なるべく類似の内容を組み合わせたり、同一の内容を選んで指導することによって、好ましい学習の雰囲気を作り上げることができるし、教師の指導も進めやすくなることが多い。

このためには、2 学年分の指導内容を工夫して配列するといった準備が必要である。

②-1 類似内容の組み合わせ（類似内容指導）

異なる学年の子供に対して、類似の内容を指導するものである。

例えば、「たし算」は、1 年の子供も 2 年の子供も学習する内容である。そこで、1・2 年の複式学級の子供たちに、同時にたし算の指導をすることがある。学年がちがう子供たちには、異なるたし算の問題を与えるので、数の大きさや計算の考え方などはちがってくる。あるいは、3・4 年の複式学級で、「資料の整理とグラフ」という単元の指導を行い、3 年の子供は「表と棒グラフ」を学習し、4 年の子供は「表と折れ線グラフ」を学習するといった例もある。このように類似の内容を組み合わせで指導する例は、本書の後半に掲載されている。

こうした指導では、学級内の子供たちが同じような問題に取り組むので好ましい雰囲気を作ることができる。前に述べた複式学級の特徴を生かすことも可能となる。その一方では、異なる学年の学習内容をうまく組み合わせるといった面での工夫が必要となる。それぞれの学年での単元の指導時数が大きく異なるということもあるので、指導する前後の単元との関係にも配慮する必要がある。

②-2 同一内容の組み合わせ（同内容指導）

異なる学年の子供に対して、同一の内容を指導するものである。これは指導の目標と内容の同一性を追求したものであって、同内容指導とよばれる。この指導は、単式学級での指導に近いものとなる。

このことにかかわって小学校学習指導要領の総則の中では、内容等の取扱いに関する一項目として次のように示されている。「学校において 2 以上の学年の児童で編制する学級について特に必要がある場合には、各教科及び道徳の目標の達成に支障のない範囲内で、各教科及び道徳の目標及び内容について学年別の順序によらないことができる。」

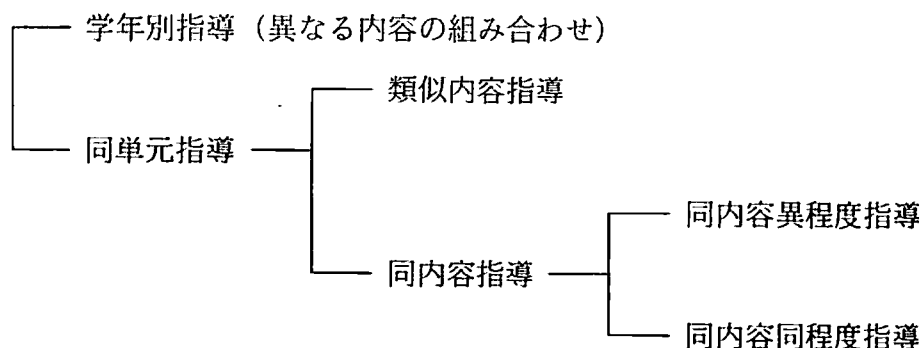
算数科で同内容指導を行うためには、隣接した 2 学年分の指導の目標や内容を検討して、それを 2 か年の期間にわたって配列し直した指導計画を作成するなどの工夫が必要となる。この計画で指導を実施すると、本来は上の学年で指導される内容が、下の学年で指導されることも起きてくる。そのため、基礎的・基本的な内容を子供たちが十分に身に付けていけるような指導上の配慮が重要となる。

また、転入や転出の子供がある場合には、関係する学校との連絡を十分にとる必要がある。

なお、同内容指導を行う場合に、学年のちがいによって、実現すべき目標の程度を変えることがある。これを「同内容異程度指導」とよぶ。例えば、計算の指導で、計算にかかる時間を下の学年の子供には多くするといった工夫があげられる。

これに対して、学年の区別をしないものを「同内容同程度指導」とよんでいる。

以上に述べてきた、指導内容の組み合わせの仕方を図にまとめると次のようになる。



(2) 指導方法の工夫

① 直接指導と間接指導を組み合わせる工夫

複式学級の授業では、子供が教師から直接に指導を受けるといった場面がある。また、教師が一つの学年の子供を直接に指導している間に、他の学年の子供たちは、与えられた課題などを解決するために個人または集団で学習活動を進めているといった場面もある。前者は直接指導、後者は間接指導とよばれる。

複式学級での毎時間の授業の中で、直接指導と間接指導の時間をどのように配分するかといった計画を適切に立てることが大切である。直接指導が一つの学年の子供から他の学年の子供に移ることを、「わたり」とよんでいる。「わたり」によって間接指導となった子供が、自主的に積極的に学習が続けられるような配慮を普段からしていくことが大切である。間接指導の際、子供が個人で、またはグループなどで協力しながら学習を進めていけるように、主体的な学習の仕方を身に付けていけるような配慮を普段からしていくことが大切である。

② 少人数のよさを生かす工夫

子供たちの中には、様々な考え方や意見などを取り入れて学習活動を進めていくことに困難を感じているものもいる。話し合いなどを積極的に行って、発展的に学習していくことが難しいという子供もいる。

少人数の学級では、教師が一人一人の子供のよさや可能性をとらえやすいという長所

がある。それによって、一人一人の子供に応じた支援や援助を行うことによって、算数への関心・意欲・態度を高めたり、数学的な考え方を味わえるようにすることもできるようになる。

教師の配慮によって、一人一人の子供が集団での学習活動の中で、適切な役割を果たせるようにしたい。また、目標を実現したという成就感を味わえるようにしたいものである。それによって、子供たちが学習への自信をもち、自ら学ぼうとする意欲を高めていけるようになることが大切である。

3 指導上の留意点

複式学級での指導内容の組み合わせと、それに基づく指導方法の工夫については先に述べた。それぞれの指導ごとに、指導上の留意点をあげることにする。

① 学年別指導

学年別指導の長所として次のようなものがある。

- 教科の系統性を踏まえやすい
- 指導計画が作成しやすい
- 転入や転出の子供の問題に左右されない

また、学年別指導の短所として次のようなものがある。

- 直接指導のできる時間が少なくなる
- 個別指導などの時間が設けにくい
- 直接指導と間接指導の組み合わせにより、指導の計画や実施が複雑になる
- 1時間の授業のために、異なる教材研究や準備が必要となる
- 異なる学年の子供が協力して学習することが難しい

このような長所を生かし、また短所を補うために、次のような点に留意したい。

- ア 教具や教育機器を活用して、直接指導と間接指導を効果的なものにする
- イ 子供たちが学習を主体的に進めていけるような意欲や態度を育成する
- ウ 学習の確かめなど、両学年が共通して活動できるような場面を用意する

② 同単元指導

②-1 類似内容指導

類似内容指導では、複式学級の子供たちが協力しながら学習できる。また、それぞれ

の学年に応じた基礎的・基本的な内容を身に付けられるという長所もある。こうした長所を生かすために、次のような点に留意したい。

ア 学習指導の目標を明確にする

類似の学習内容によって指導が行われるので、それぞれの学年の子供たちにとっての目標を明確にしておくようにする。

イ 共通の素材を用いて学習できるようにする

複式学級の全員の子供が協力して学習できるように、共通の素材を用意するようにしたい。共通の素材の中から、それぞれの問題を見つけるといったことも考えられる。共通の学習をしているといった一体感が学級の中に生じて、複式学級の特質を生かしていくことができる。

②-2 同内容指導

次のような点に留意したい。

ア 教材研究を十分行い、内容の本質的な部分が同一であることを確認する

一見すると同じ内容であっても、別の事柄を取り扱っているという場合がある。同一の内容であることの確かめが大切である。

イ 教科書を適切に使用していく

2学年分の教科書の内容を組み合わせるなどの工夫ができる。

ウ 学年での目標の程度が異なるときは、そのちがいを明確にしておく

同一の内容で指導を行うため、学年ごとの目標を明確にして、一人一人の子供が学習の成就感を味わえるようにしたい。

エ 全員の子供ができるだけ共通に学習していけるようにする

共通に学習できるようにして、複式学級の特性を生かしていくようにしたい。